



最高に阿保な最高の文芸研(in 阿波)

徳島大会を終えて

委員長
辻惠子

◆「地の利がなくても、徳島で行うことには意義」

(松田さん)

コロナ禍がなければ、二〇二二年に開催を予定していた第五六回徳島大会が、二年遅れで今年二〇二四年、第五八回大会としてようやく実現しました。この間、会場となつた四国大学に何度も足を運んでいただき、ずいぶん徳島サークルの松田さん、沖野さんにはお手数をおかけしました。また今年の開催がきまつてからは、枚方サークルはじめ関西のサークルも共に活動して現地サークルを支えてくださいり、本当にたくさんの方が結集して無事二日間の大會を終えることができました。ありがとうございました。

大都市ではなく地方で開催することの意味は大きい、と思いつつ、現実に参加者はどのくらいになるだろうかと案じていました。でも参加者一六四名のうち四五名、二七パーセント強が現地徳島という嬉しい結果でした。全体数は目標を下回りましたが、

徳島の先生方に文芸研大会に足を運んでもらえたことは、今後につながる大きな成果です。徳島サークル拡大へと結実していくことを願つてやみません。

さて大会後、時を置かずに大会総括を行うことも定着して、八月二十四日のサークル代表者会議ではそれぞれの担当者から大会をふり返つて報告していくだき、みんなで成果と課題を話し合うことができました。

ですからここで繰り返しませんが、千葉大会につながりたいと思います。（特にオンラインについては様々な角度から意見が出されました。これは大会に限らず、各地のサークル活動にも共通していますので、会議録をぜひ参考にしてください）授業のビデオ撮影が困難になりつつあり、まして動画配信など無理という状況が広がっている中、公開授業を提供してくださった奥さんには感謝の思いでいっぱいです。やはり授業実践をその場で見、シンポジウムで理解を深めてもらうことは大会の大きな目玉です。今回の公開授業とシンポジウムが、参加者に文芸研の授業＝理論をもとに深く語り合う授業の魅力を伝えられたことは大きな成果です。

山中尊生さんの実践報告は、「文芸研の実践報告なのだから文芸理論にもとづいた授業実践をもつと取り入れて」、という意見もありましたが、「尊生さんの実践報告なのだから尊生さんの個性あふれる

報告でよかつた」という見方が多く、特に初参加者からは好評でした。（辻の個人的な意見としては、基調提案をもつと文芸研の理論と実践に重きをおくようにすれば、実践報告においてその人ならではの個性を生かした報告をしてもらえるのではないか、つまりそういうバランスのとり方をすればいいかもしない・・・と思います。）

各分科会の提案については、研究部の総括を見ていただき、特に次に提案する人には成果と課題をふまえて実践していただけたらと思います。学年別分科会はもちろん、領域別分科会も今回をふまえて、次へと構想をひろげてください。

来年は千葉大会です。秋山さんを中心とした千葉サークル、そして東京・神奈川のサークル、みんなでしっかりと準備を進めていきます。ぜひ来年夏には、全国から千葉へ一人でも多くの参加をお願いいたします！

◆「大会の準備」だけに終わらせずに

さて、まもなく実践研が始まります。かなり前から「冬の実践研で教材研究、春の実践研で授業実践を検討する」というスタイルが続きてきたので、実践研は大会の準備のように受け取られがちです。もちろんそうした面もありますが、「実践研を『文芸

研の最も重要な理論と実践の基礎となり、同時に最先端となる学びの場』にしたい」という思いをずっと抱いてきました。

周りを見回してください。「指導書通りに授業していくには、子どもに力がつかない」「教科書の手引きのまま授業を進めるなんて教師として恥ずかしい」と怒ったり呆れたりしている間に、その傾向はますます加速してはやそんな違和感を抱く教師が少數派になつている状態ではありませんか？教育研究者の鈴木大裕氏が「構想と実行の分離」（※1）と表現したように、肝心かなめの「何を」「どう指導するか」、そこを考える仕事、まさに構想する仕事が教師の手から奪われ、現場の教師はただ末端の実行役にされてしまつていています。この現状を思えば、わたしたちが実践研で追求しているのは、まさに「構想し実行する教師本来の仕事」です。

冬の実践研ではレポート討議だけでなく、研究部が企画する「理論学習」もあります。教材を自力で分析する＝構想力の土台を創るための時間です。前回に引き続き、村尾さんを中心により深く学び合いましょう。

◆「近づくな、関わり合うな」

文科省の報告に（※2）よれば、小・中・高等学

校における暴力行為の増加が著しいようです。調査方法等さまざま課題があるとはいえ、右肩上がりの傾向を看過できないはずなのですが、「去年も同じようなことを言っていたな」と既視感があるのを否めません。昨年の結果について、文科省はコロナ禍明けで、子ども同士の接触が増えたことに起因するのでは・・・のような呑気なことを言つていただけれど、今年はさらに接触が増えたから？人が人との距離が縮まればもちろんもめごとも増えるでしようが、それが暴力を助長すると考えるのはあまりにもおそまつでしょう。そこに適切な生徒指導があれば、人と人が関わり合うことから学ぶことは多く、集団の中できこそ子どもは成長していくはずです。（生徒指導だけでなく、教科で言えば国語科でこそ「人間を学ぶ」「生き方を学ぶ」ことが必要不可欠です。そんな学びがないことも大きいでしょう。価値項目が先にある道徳ではできないことですから。）

でも・・・最近よく耳にするのは、保護者が我が子に対して「あの子には近づかないように」という言葉です。なんてことを！と呆れていたら、先生の中にも「離れていれば、もめることもないでしよう」
「そんな子は放つておくのが一番。関わり合わないよう」「という「生徒指導」をする人もいて、驚くばかりです。最大の問題は、「お勉強」ばかりに気

をとられ、（その「お勉強」もおそまつですが）その子の人格の形成をめざす、つまり子どもを人間として育てる、その観点の欠落ではないでしょうか。

学校は人間を育てる場であり、教師は人間を育てるのが仕事です。そのことを改めて肝に銘じて、「関係ない」という声を聞き流すことなく、「ちょっとまって」と立ち止まりましょう。あまりのことに呆れてばかりいると、いつの間にかそれが当たり前になってしまいます。面倒であっても、ささやかな日常で流れで行ってしまう「おかしさ」を問いかけることが必要です。

すべてのものごとは密接不可分につながりあつています。そしつれ合つて変わります。身近な人間関係も、大きな地球環境も、世界の国々の政治や経済状況も・・・。そのことを広くみんなにわかつてほしいものですね。「関係ない」ことなど一つもないのです。

感謝いっぱいの徳島大会

「ありがとうございました。」

徳島文芸研阿南サークル 松田真理

この夏、徳島大会に参加してくださったみなさん、ありがとうございました。文芸教育全国大会の徳島大会は、今年で二度目でした。一度目は、二〇〇一年、二十一世紀始まりの年。三日間の開催で、「あと数人で、参加者が五百人だね。」と、徳島の仲間と話していたことを思い出します。松谷みよ子氏が、講師として来てくださいました。あれから二十三年、全国大会への動員数を伸ばすことがなかなか難しい中、徳島に人が集まるのかどうか。前回でも問題になつた、徳島の「地の利」のマイナス面を思うと心が痛い。しかし、徳島大会の開催を断る理由にはならない。それより、こんな地の利の悪い徳島で、大会を行う意味を見つけることの方がおもしろいに決まつていて、と思いました。それに賛同してくれる仲間もいます。会場は、三年前から四国大学と話を進め、担当の方も大会開催に協力的です。わくわくしながら、全国大会にむけてみんなで役割を分担し、準備にかかりました。

※1 鈴木大裕「崩壊する日本の公教育」（集英社新書 2024.10）

※2 文科省「令和四年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要」

「文芸研の大会だからこそ」のいいところを説明しようと、出来あがつた大会要項を持ち、沖野真実さんと共に、勇んで学校訪問を始めました。まずは、近くの小学校から参加の御誘とお願ひに回りました。が、どの学校の校長先生も好意的に話を聞いてください、大会参加を先生方に進めてくださいました。それで調子に乗つた私たちは、訪問できなかつたなどという学校があつてはいけない、仲間外しはよくないと思い、阿南市内の全小学校を訪問し、隣の小松島市も五校ほど訪問してきました。

ところが、「階段からおちて骨折した人」「法事で九州へ行く人」「39度の熱が出た人」「大事な行事が重なつた人」等々：参加できなくなつた人たちより連絡が入つて来ました。よりによつてこんな時になると、残念でなりません。ですから、全国大会に参加できるということは、本当に、奇跡のように有難いことなのだと思いました。

けれども、活動を続けていると、そこには教え子の娘さんとの出会いや、「わたし、たかし（教え子さん）の嫁です！」という元気いいっぱいの新任教師との出会いなど、心が踊るうれしいことが、たくさんありました。奇跡のように有難いことです。

実際に、大会に参加してきださつた方のアンケートを見ると、「これから実践に役に立つた」「この

ように、子どもたちが生き生きとするような授業をしてみたい。」というものがたくさんありました。分かりやすく、質のよい提案レポートのおかげです。徳島大会では、参加してくださつたみなさんの、どの方一人でもいなければ、満足いくものにはならなかつただろうと思います。ハイブリッド開催のため、オンライン配信に苦労しながら取り組んでくださつた方々、一年をかけてレポートを仕上げてくださつたみなさん、忙しい中、文芸研で学ぼうと来てくださつたみなさん、参加したいと願つていながら、参加できなかつた方々も。本当にありがとうございます。徳島のような辺鄙な地域で全国大会をする意味は、子どもたちのためによりよい授業をしたいと願う先生たちに出会い、共に学び合う機会を持つことではないかと思います。

私は、この一年間に、四回勤務校が変わりました。そのおかげでたくさんのが若い先生方に出会えて、授業を見てもらうことや一緒に教材研究すること、目の前の子どもたちについて語り合うことで、私も先生方と学ぶ楽しさを味わつています。与えられた場所で、これからも文芸研の学びのよさを伝えていたら幸せだと思っています。

初・高学年分科会

千葉 秋山香鈴

私はこの十年近く特別支援担任をしています。私が今まで関わってきた子は低・中学年、または低・中学年相当の学習段階の子が多く、文芸研で学習する際も、いつも低学年や絵本の分科会に参加していました。しかし、今受け持つていてる子の一人が（一年生からずっと担任していく五年目なのが）知的に遅れがない五年生なので、今年はついに高学年の教科書を教材分析しなくては！ということで、五年生分科会に参加しました。

「注文の多い料理店」はだいぶ昔に読んだきりで、お話を思い出せなかつたので、行きの新幹線で復習がてら読みました。大学時代に少々文芸研を学んでいるので、「題名のイメージの話になるだろう」とか「二人のしんしを視点人物として同化・異化させるのだろう」などとあたりをつけながら読んだつもありでした。でも一つだけ、まったくわからなかつたことがありました。それは「これ、最後どうやつて一般化・典型化するの？」ということです。その解釈も含めて大会がとても楽しみになりました。

さて、いよいよ五年生分科会。松山先生の授業展開はとっても面白く、子どもたちの反応も、さすが大阪の子！こんなに頻繁にツツコむんだ。と新鮮でした。グループでは、「二人のしんし」について、話し合いが深まりました。一場面の「二人のしんし」像をしつかり深めると、その後の山猫に騙されにく展開も「こういう人物像だから」と納得することができるとわかりました。

そして私が一番疑問だつた「典型化」についてです。これも、さすが松山先生の授業展開、勉強になるなあと感動でした。九場面まで散々「二人のしんし」に批判的な言葉を投げかけてきた子どもたちを、先生の切り返しで初読の気持ちに引き戻す。そして「自分にも同じような傲慢さや知つたかぶりする気持ちがある」と子どもたちに気付かせていました。高学年の文芸教材をここまで深く分析したのは初めてだつたので、子どもたちにここまで深く考えさせることができるのであつたことがわかりました。自分の授業でどこまでできるかわかりませんが、（そして残念ながら東京書籍ではないのですが）今後の教材分析と授業の参考にさせていただきたいと思います。

二日間の大会で、運営に関わった先生方、レポートされた先生方、本当にお疲れ様でした。ありがとうございました。

うございました。徳島・淡路島観光も含めて、とても実りのある「全国大会旅行」になつたと感じています。

【徳島大会の思い出】



事務局通信

強烈な寒波が押し寄せ、寒さの厳しい冬となりました。いかがお過ごしでしょうか。

山中尊生事務局長に代わり、新しく事務局長になりました、山口東サークルの酒井大輔です。今年は学校を変えたり、新しい校務分掌になつたり、ベトナムの子がホームステイに来たり、ついに全集が全てそろつたり、そして事務局長になつたりなどなど、変化の多い年になりました。わからないことや、山中尊生さんのようにうまくできないことも多いかと思いますが、皆様と一緒に文芸研を盛り上げていけたらと思います。よろしくお願ひいたします。

さて、来年の千葉大会に向けて、松戸サークルの秋山亮介大会委員長の元、関東ブロックの皆様を中心には、着々と準備が進んでいることと思います。冬の実践研では、レポーターの皆様も、全国の皆様も多くの学びの場となるよう、事務局として支えていきたいと思います。そして、夏の全国大会につなげていけたらと思います。どうぞよろしくお願ひいたします。

☆文芸教育、授業シリーズ販売をよろしくお願ひいたします。まずはサークルでの読み合わせや、各地の学習会での紹介などで、文芸教育や授業シリーズ

の良さをたくさんの方に伝えていきましょう。また、良い方法があれば全国で共有して、たくさんの方に届けていきましょう。12月に編集会議も行われました。どういう特集、構成などにすればより多くの手に渡るのかなど考えていきました。各サークルのご協力をどうぞよろしくお願ひします。

☆サークル会費納入の

お願ひ。まだお済みでないサークルは実践研での納入、または振込での納入をお願いします。ご協力よろしくお願ひします。



今後の予定

5月 春の実践研（神戸）

8月2日（土）・3日（日） 文芸研千葉大会

*新しい年間計画ができましたら、年間計画をもとに様々なご準備をお願いします。

【事務局員の妄想日記】ある日の学級通信より

クリーミー、ありがとうございます

平日最後となる金曜日は、時々レトルトカレーで家事の負担を減らしています。レトルトと言つても、最近はクオリティーが高い。無印良品のバターチキンカレーが好きでよく買います。

先週金曜日夕飯がレトルトカレーの日で、その準備として無印良品で買い物していた時のことでした。いつものようにバターチキンカレーに手を伸ばしましたはいいですが、手が止まりました。視界の端に、気に入る物が入ったからです。それもカレーなのですが、「クリーミーバターチキンカレー」でした。バターチキンカレーの豪華版、リッチ版。値段もランクが上のカレーとして位置付けられているようです。

ここで注意したいことが。よくあることです、ここで欲を出してしまい、高価な方を購入。その味が忘れられなくなり、もう高級な方でないと食べられなくなる。前の生活には戻せない。そんなことは嫌なので、こういう場合、何とか買わず終えることが多いです。

しかし、バターチキンカレー好きの自分には耐えられませんでした。数分悩んで、色々なカレーを見

た後に、クリーミーバターチキンカレーに戻つて来て、買い物かごに入ってしまいました。もうこれで、過去には戻れない。戻せない。少しお高いカレーばかりを買う道を選んでしまったのです。

金曜日の夕飯、どれほどの味か興味があつたので、それはそれでワクワクして帰宅しました(前に書いた、水泳部を引退した下君と再会したあの日)。

1合分のお米をお皿に盛りました。空けておいたスペースに、温めたクリーミーバターチキンカレーを流し込みます。見た目にクリーミーです。生クリームがクリーミーさを際立たせているようです。肝心なのは味です。スープで湯気の立つカレーとライスをすくいます。あむっ…。うん。これはクリーミー。でも、けっこうクリーミーやなあ。だいぶクリーミーやぞ。…あれ?こんなことってあるの?こんなことってあるんですね。なんとなんと、ずっと食べててきたバターチキンカレーの方が好みでした!クリーミーに心を奪われてしまつたかと思いきや、食べてみたことで逆に前の方が好きだと思えました。クリーミーバターチキンカレー、ありがとうございます!



【やっぱり楽しい作文指導】

笑うのを堪えた鬼 Nさん

私の四歳の弟は鬼がとても怖いらしく、鬼を見たら「ごめんなさい！」と何回も誤りながらめちゃくちゃ泣きます。そこで、私も鬼になつてみました。

鬼は節分の時に買って使わなかつた鬼の仮面を使っています。同じ服だとバレるかもしれないのに、適当に服を着て仮面をつけて弟のところに行きました。鬼はいつもお父さんですが弟は気づかず、泣きながら逃げ回っています。弟が暴力をしたり物に当たるなどの悪いことをした時にお父さんが鬼に変装します。初めて見た時、私は笑いながら「なるほど。」と感心していました。

ある夜、弟がわがままをずっと言つていて、聞かなかつたら暴れて物に当たつていきました。流石にやめてほしかつたので私が注意しても聞きませんでした。イラッとしたので、鬼になつてみようと思いました。髪をくくつてお父さんの服を適当に着て長い棒を持つて弟の前に行きました。

そしたら、弟の顔は一瞬で涙だらけになりました。私なのに鬼だと思い込んでいたり、弟がわがままから急に態度を変えたので、最初少し声に出して笑つ

てしました。適当に「うう…。」と唸つて笑わないようにしていました。笑わないようにしていきたものの、おかしくて可愛くて仮面の下は笑顔になつてしましました。棒を振つていたらお父さんが倒れる演技をしていました。それも見た弟焦つていました。ずっと泣いているのが可哀想だつたので、一旦部屋に戻つて鬼の仮面を外しました。それを見ていたお母さんは笑顔でした。小学四年生の弟は何故か泣いていました。理由を聞くと、弟が泣いているのが可哀想だつたからでした。

うまくいきましたが、まさか四歳の弟だけではなく、小学四年生の弟も泣くとは思いませんでした。ですが、これからも悪いことをしたら鬼になろうと思いません。

鬼の仮面があるからバしないものの、声は出ちやうよな(笑)。鬼は鬼を貰かなければなりませんから。服もお父さんの服を着て、棒も振り回す。しかも、お父さんも名演技で倒してくれて。結果、第二人が泣くという意外な結末！泣く理由もそれぞれにちがう。笑っている理由も、お姉ちゃんとお母さんでそれぞれ違う。でも、N家は一つ。愛に包まれた家族です。最高の鬼です。やさしい鬼です。最高のお姉ちゃんです。